

今年度の時事問題セミナーのテーマは「持続可能な地域社会に向けて」ですが、今年外国人の在留資格として『特定技能』加わりました。人口減少社会において外国人と共に生きる社会へ、私たち自身も異文化への理解が必要、包摂です。そんな折り、信濃毎日新聞紙上の紹介で気になっていた書籍。村の図書館の新刊棚に！すぐにお借りして、定例会中の昼休み、就寝前に読みました。

お勧めします！

「ふるさとって呼んでもいいですか」

6歳で「移民」になった私の物語

ナディ著 発行 大月書店



ナディは1984年イラン生まれ。91年に出稼ぎ労働目的の両親と共に来日し、超過滞在のまま首都圏郊外で育つ。小学3年から公立学校に通い始め、両親は必死に工場で働き、こどもたちを養い、ナディは弟たちの面倒をみながら周囲の人々に支えられ、学び、学校生活を送ってきた。在留許可がないため医療保険に入れず、ケガをしても医者にはいかず我慢。つらい思いをした。高校在学中に家族と共に在留特別許可を取得。(在留特別許可の裁量は法務大臣にあり、強制送還になるケースも少なくない。)11年ぶりにイランに一時帰国した時には、既に母国の習慣に違和感が！故郷の人からも異国人扱い、自らは日本食が恋しく早く日本に帰りたいだったという。日本の大学卒業後は都内の企業に勤務し、現在は日本とパラグアイのハーフの男性(日本・ポリビア国籍)と結婚し2児の母。日本に来て26年。人生の大半をこの国で生き、もはやふるさとはここ日本！

彼女が説く『内なる国際化』とは、日本人が海外に行き、海外から観光客が来ることではなく、日本に住む外国人や異文化のルーツを持つ人が増えること。

国際結婚や在留資格で日本に来た親を持つ子供たちなど異文化ルーツのこどもは全国で約8万人。日本語の指導が必要なこどもは約4万4千人。親の希望が無ければ就学できないこともあり、未就学児は約8400人という(2016年文部科学省調べ)。

彼女が歩んだ26年の間、社会情勢は著しく変わり、日本における外国人に関する社会の在り方や法律もだんだんと変わってきた。

彼女は言う。

「日本で育った日本人にとって『外国人労働者』や『超過滞在』が他人ごとに聞こえても、『就職氷河期』『リーマンショック』『新卒至上主義』『ゆとり教育』『保育園落ちた』などと聞けば心当たりのある人は多いでしょう。

一度踏み外したらリカバリーがきかない社会が変われば、多くの人が生きやすくなる。

『多様性を認める』とは、そのような社会をめざすこと。

『日本人らしい日本人』や『外国人らしい外国人』だけの時代はもう終わろうとしています。」